

が ん ば

島三小育友会報
(特集号)
発行 広報部
印刷
つるかわ印刷所

夏休みの無事故は、みんなの力で

交通部長 仲田恒美

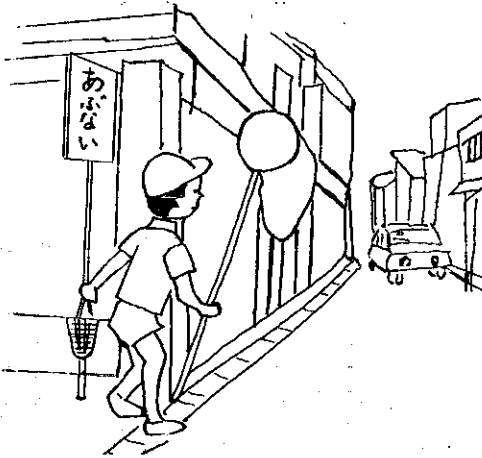
一学期も無事に、無事故で終わろうとしておりますが、これも育友会員の皆様の、熱心な補導をはじめ、日ごろより交通安全へのしつづけに気を配ってくださって、いるおかげだと、心より感謝いたしております。

さて、二十一日より長期にわたる夏休みが始まっております。その四十二日間、子どもたちの生活は、学校生活より家庭生活へと重点が移り、兄弟や近所の友だちとの遊びとか、遠方への散歩も多くなることから、各家庭一軒一軒で、毎日の交通安全に気を配っていただきたいこと

は勿論のこと、危険な状態を目撃した場合、直ちに注意し合う意気合を、育友会員の一人一人が、心に約束し合っており、子どもたちの安全に、事故のない明るい夏休みを過ごさせるよう、努力しようではありませんか。

とりわけ、次の「夏休みの交通安全三原則」を、親も、子どももしっかりと頭に入れ、習慣化して身につけたいものです。

一、とび出しは、ぜったいさ



- 二、横断歩道を、きちんとわたらせる。
- 三、自転車の、安全な乗り方を、身につける。

一・二年生の唯一の安全目標となりそうです。

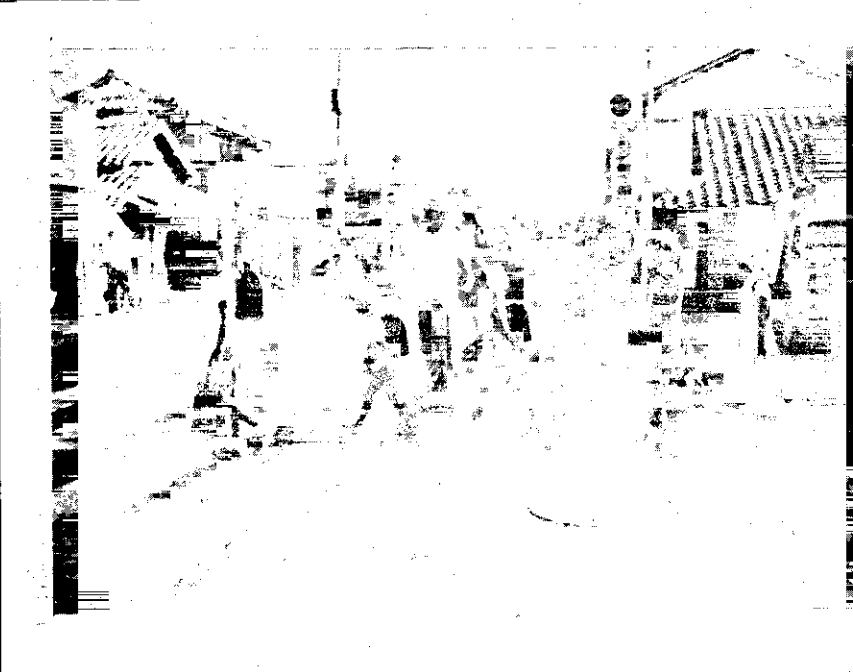
次に近道をしようとか、信号を無視して走り出そうとか、がちな中学年の子どもたちは、面倒でも、きちんと横断歩道をわたるんだという心構えを持たせることに重点をお

せぬ。

二、横断歩道を、きちんとわたらせる。

三、自転車の、安全な乗り方を、身につける。

低学年に多い、とび出し、事故は、遊びに夢中になり過ぎた結果によるものが多く、「とび出し厳禁」が、



「たい」んです。

自転車に乗る機会の多い高学年の子どもたちには、何となく、より正しく、より安全な乗り方を、身につけてもらいたいのですが、未だに、二人乗りが絶えない現状を、

何とか、この夏は絶滅できるやう、お互い親たちが注意しあって、指導していききたいものです。

とにかく、みんなの力で、無事故の夏休みにしたいものです。

子どもさんを

置いて行かないで

生活部長 松本 博

ある雑誌の巻頭随想に、だいたいの様な内容の一節があった。

『作者が所用で外出し、とある街角にさしかかったとき、何かの宣伝をしていたメガホンが宣伝用とは違った語調で「迷子ですよ」と叫んだ。

なるほど、そのそばで三才くらいの幼児がわあわあ泣いている。メガホンはまた叫んだ「子どもさんを置いて行かないで下さい」作者は無意識にその言葉を適切な表現だと思った。幼児はそっちのけでおしゃべりや買物に夢中になつてゐる親、ひどいになると故意に置きざりにする親等々、無責任親の話をよく聞く現代の世情と、迷子をあずかったメガホンの声の主の当惑が「子どもさんを置いて行かないで下さい」の一言によく表現されている……といふような内容であったが私も読んでいて無責任親への呼びかけにはびったりだと共感し

た。

ある夜九時頃、船津新地の海岸へ行った。風が少し強く岸辺は波がざわついていたが数人のつり人達が思い思いに糸をたれていた。中に夫婦でつりを楽しんでいたら一組があった。その夫婦は幼児二人をつれて一家でつりに来ている様子ではた目には、如何にもほほえましい光景であった。二人の幼児は近くを走り廻ったり綱干し棚に登つたりして遊んでいた。私は「もしも……」と考えると背すじが寒くなる思いだった。家でつりを楽しむことを否定はできないが幼児をこの危険な場所にしかも夜つれて来て自分達は夜づりを楽しんでいる夫婦の親としての感覚をうたがった。幼児の危険を少しも感じなかったのだから、幼児の存在を忘れてつりに熱中した時間になかっただろうか？

家庭の中でも「衣食住」子どもの養育に何の不自由もさせていないようだが、精神面では時として子どもを置きざりにしたり子どもの生活に無関心な日常を過していないだろうか。

子どもの非、例で「あの

子の家庭は欠損家庭で……」という言葉がよく出て来るが親の保護能力がない、生活能力がない、ということでもその子は物心両面で置きざりにされ精神的な迷子になり、手さぐりで歩いているうちに非行という暗い穴の中に落ち込んでしまふ結果になった。

共稼ぎ家庭、父親の留守勝ちな家庭、転勤、転宅の多い家庭、商売の忙しい家庭等々の家庭も親子が真に心と心のふれ合った生活を営むことの困難な時代ではあるが、子どもの生活を常時見つめ点検することは子どもに食事をおたえるのと同様に重要なことではないだろうか。



子供と私たち

広馬場 伊藤亜希子

世はまさに情報化時代。テレビ、雑誌、小説等にかじりついた現代っ子は大変な物知りである。「音の速さは秒速

小説はどうだ
「マキンとミニ
より、パンタロ
ンがかっこい
いよ。」等と
云う。昭和生
れの親達もう
っかりすると
質問責めに、
まともな返答
が浮かばない。
而し、民放に
せよ、雑誌に
せよそれ等に
は子を育てる
愛が存在しな
いのである。

芸文の会員

ご投稿ありがとうございます

視聴率を高め売り上げ倍増すれば良いのであって、あく迄自己本位のものが多い。相手の気持ち察してはくれない。そして幾年か後、子供の成長結果はきびしく批判するのである。小説・マキシ・ロ

ングヘア・流行はそれでよい。これ等はほんの表面的な問題であるから。現代の眼にふれるだけのものでなく、その根底を、親は子供達に教える義務がある。幼ない心に美しい種をまき、悪の病を除き芽を大切にはぐくんで大局を見、考える眼を心の眼を育てよう。それは、我が子だけでなく、その友や、私共が接する数多くの子供達すべてにそうありたいとつくづく思う。

下川尻 吉田三郎

藍の空
我が子の姿 見ることし

我が子には
つまらぬ父と 想いつつ
泳げる鯉の 心に育てど

新山西 高木輝美

おさな児に
今はなき日の 母とわれ

生きる術 幼なき児には
八時眠れと 苦しくわびる
何れもいわず

明日もまた
かくあれと 夜具直し

が ん ば

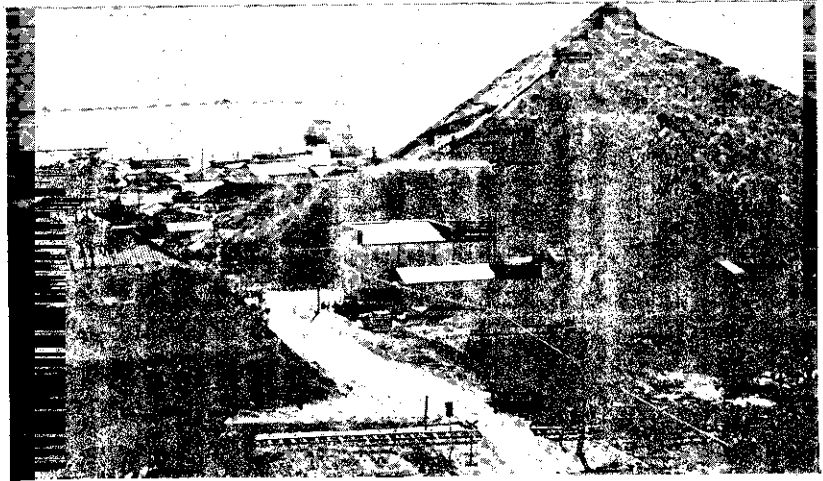
(3)

美しい自然

栄町 石本千和

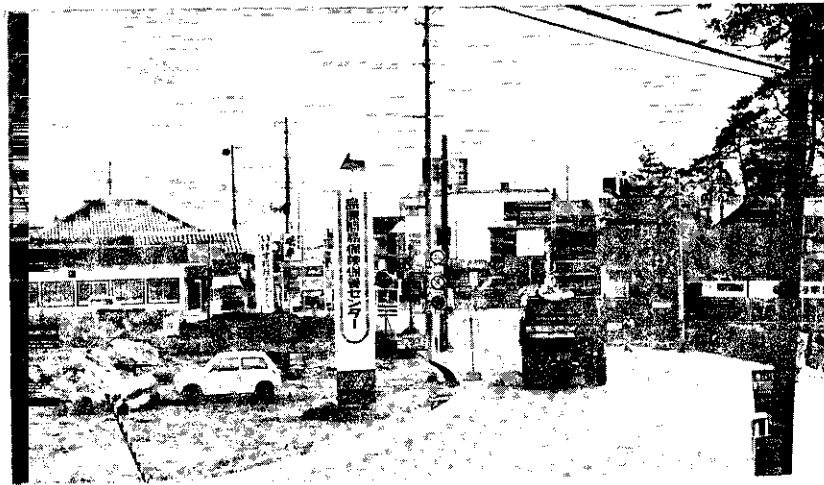
日焼けした顔で、にこにこしながら「お母さん、パケツと大きな声で友達二・三人と両手になじかにぎりしめて帰って来た。何だろうと思ってパケツをさし出すと、おたまじゃくしの足が出て尾はまだ取れていないのを、ぼろぼろとパケツの中に入れる。カエルかな、おたまじゃくしかなと云うと、友達の一人が、おばちゃんは知らんとね、これはオタマ怪獣だと云った。一匹はお腹を上向けて浮いている。あゝ死んでる」と一人が云うと一人は死んだまねだと云う。どっちが本当かなと云って見ていると、くるっと寝返りうって変な格好で泳ぎ出した。子供達はきゃきゃ云って大喜びである。こんな時の子供の顔は本当に可愛いものだ。

田んぼも野原も、どんどん家が建って減って行く。せいぜい今の内に思い切り自然とさせたせませたい気持ちでいっぱいです。



前の

外港駅附近



現在の

外港駅附近

安かったガンバ

新山 徳永まさよ

わたしたちの、小さい頃は、「がんば」はたくさん取れて、外の魚より安く買えました。でもその「がんば」の洗いかたをおそれ、人々は「がんば」を買おうとはしませんでした。魚屋のおばさんにたずねたら、この「がんば」には「どく」が三つ、四つあるのよと教えてくれました。よそから来た人は、島原の人は命知らずの人がおおいといって、びっくりするほどでした。

今では、外の魚よりたいへん高く、そして国民のほとんどが大好物で、値段のほうも一べんにはねあがり、今では普通の人には、手が出ません。一、二年に一回、口にはいるくらいです。それも、お祝やとなり近所のお土産ぐらいです。また、昔のように安く買えるようになって、いいなあと思います。



靈南 吉田良子

デゲがんば

食わせた客が

又来ると云う

もう一度

島原行こう

がんば食い

春近かし

がんば食うなら

島原へ

ガン桶を

背なにかついで

がんば食い

左右みて

わたるよい子に

事故はない

下川尻 佐藤 伝

春が来た

つぼみの花が

ぱっとさく

有馬船津 高木ミヅエ

道路で

キャッチボール遊びは

やめましよう

あるバスの中で

下川尻 勝田良子

私は買物にも、めったにバスには乗らない。と言うのは、土をふむのがとてもすきだからです。でも遠い所に行く時は、そうもいかない事がある。そんな時には、バスを利用する。

ある日、バスに乗って里に行く時のことです。バスに乗り、座席にすわっていた。あるバス停で一人の中年の女の人が乗って来た。その人は私の隣にすわっている人の知り合いらしく、すぐに話を始められたので、立話も疲れられるだろうと思つて、私は席を譲った。ところが、どうでしょう。その人は礼も言わずにあたりまえだと言ふ顔で、スツとすわってしまったのである。席を譲っても、この人のような態度をとられては、納得がいけない。

坂上町 河野節子

春雨や

桜も散りて

あじさいの

目にあざやかな

二人傘

有馬船津 鈴木充佐子

風になってしまいたい

ねがいでもいい

よくばりな心をすてて

きれいな

花びらみたい

あてもなく

とんで行きたい

朝おきて

なにをするやら

ねぼけ顔

鈴木優子

ふるさとの

恋しき母を

思い出し

ひとつぶ涙

ほほ流れだす

元船津 吉田ハチエ

汽車の窓

外をのぞけば梅の花

この仕事

客の目がある声がある

旅すれば

はるか聞こゆる波の音

編集

後記



いよいよ、夏休みにはいりました。子どもたちは開放感に満ち溢れ、元気に遊び、気楽な気持ちで机に向い、マイペースで毎日を過ごす此頃ですが、生活のすべてを家庭主体におく夏休み期間は、親にとつても、躰け、計画性の指導などいろいろ気心配なことも多いと思います。

夏休みに入って特に注意してもらいたい。子どもは交通補導、生活指導面のこと々々などを主軸に、各々の部長さんからお言葉をいただき、それに加えてみなさんからご寄稿していただいた、ご意見、詩、俳句など、すべての原稿を掲載させていただきました。たくさんのご投稿のおかげで特集号の発行ができました。ことを心から厚くお礼申し上げます。

